

特別養護老人ホームにおける地域資源としてのア プローチ空間の現状把握

— アプローチ空間に対する地域住民の意識構造の特徴 —

小森谷 実優^{*1}, 崔 熙元^{*2}

Assessing the Current State of Approach Space as a Community Resource in Special Nursing Home

— The Characteristics of Structure of Consciousness of Local Residents on the Approach Space —

Miyu KOMORIYA, Heewon CHOI

We focused on the approach space of special nursing homes where contact between facility and local residents occurs first and examined the structure of attitudes of the local people. The results are as follows

1. The state of the site, which is spatially connected to the local area, is associated with the residents' individual psychological states such as healing and stress. The possibility of triggering emotions related to the individual psychology of the residents, such as stress, was confirmed.
2. The condition of the site strong on the local people evaluation.

KEYWORDS : Nursing Home, Exterior, Approach space, Structure of consciousness

1. 研究の背景

現在、高齢者施設は高齢者福祉の拠点として、地域とのさらなる協力関係の構築が求められている。高齢者施設のひとつである特別養護老人ホーム（以下、「特養」）は、介護保険制度における入居施設サービスのひとつである。高齢者福祉において、要介護高齢者の身体介護・生活援助・終の棲家の役割を持ち、地域に欠かせない重要な施設であり、1963年に創設されて以降、その施設数は

現在まで緩やかに増加している。厚生労働省の調査によると、特養の約7割が開設10年を超える施設であり^{注1)}、今後、多くの施設が建物の修繕や改修の時期を迎えることが予想される。

特養は地域包括ケアシステムにおける地域の拠点としての重要な役割を持っており^{注1)}、多くの地方公共団体では、その整備方針において、地域との関係を重視するよう促しているが、このような役割や地域住民のニーズ等を反映した具体的な計画のガイドラインはない。そのため、施設の修繕や改修は消極的に留まるケースが多い。また、特

*1 専攻科建築学コース(Advanced Course of Architecture) 令和4年度修了生

*2 建築学科(Dept. of Architecture), E-mail: choi@oyama-ct.ac.jp

養は、重度化と高齢化により、高齢者施設の中でも特に施設と地域住民との心理的な距離が生じやすい施設である。

2. 既往研究の考察及び研究目的

崔らは、高齢者施設のある地域において住民の施設に対する評価は施設との交流や施設の空間開放性と強い関連が見られ、住民の地域愛着形成に影響を及ぼすことを明らかにしている。^{1) 2)} この研究は、高齢者施設が非施設利用者に与える影響を明らかにしたという点で意義があり、非施設利用者である地域住民に地域にとって高齢者施設が大きく関係していることを示したという点で評価できるが、非施設利用者が高齢者施設に対して、どのような欲求を持つのかについては明らかにされていない。また、西野らの研究は、高齢者人口がピークを迎える 2040 年以降、これまで増設されてきた高齢者施設が各地で供給過多になる可能性を示している。³⁾ しかし、今後の施設の利活用にも関わる高齢者施設の存在が地域住民に認識されているかどうかという視点で課題を残している。

施設の敷地入口から施設玄関までの空間であるアプローチ空間は施設の利用有無にかかわらず、施設と地域住民との関りが最初に発生する物理的な接点となる空間であり、地域住民にとって施設に対する評価を左右する住環境の一部であると言える。以上のことから、施設と地域の交流や住民の地域愛着形成を促し、特養の地域浸透性を高めるため、アプローチ空間について住民のニーズを把握し、修繕や改修に取り入れることが重要と考えられる。そこで、本研究ではアプローチ空間に対する住民の経験と意識に着目する。アプローチ空間に対する住民の意識構造を明らかにし、地域に高齢者施設が浸透し、地域住民にとっては、住環境の一部を形成するプラス要素として、施設にとっては地域と共存するために、アプローチ空間が持つべき根本的なニーズを明らかにすることを目的とする。

3. 調査の結果

3. 1 調査方法

地域住民にとってのアプローチ空間に対する意識構造を明らかにするため、栃木県小山市にある

表 1 調査概要

調査対象	用途地域	第一種住居地域
	面積	28.8ha (都市計画決定:平成9年)
	世帯数	866 世帯
	配布・回収	350 (無作為ポスティング)
	回答	120 (回答率: 34.3%)
隣接施設 S	用途地域	無指定地域
	開設年度	平成2年
	施設形態	特別養護老人ホーム (従来型)
	定員	54 名

表 2 調査内容

対象地域	<p>小山東ニュータウン (図中の太線の枠内)</p>
調査内容	回答者の高齢者施設に関連した経験、アプローチ空間を形成する要素に対する評価、写真を選択した理由

表 3 アンケートに使用した写真一覧^{注2)}

建物	 ピロティ	 一階の中の全体的様子が見える	 一階の中の一部分の様子が見える
	 一階の内部が見えない	 一階に店舗等がある	
仕切り	 レンガ	 コンクリート	 鉄柵
	 植栽	 木製の仕切り	 石
	 竹	 植栽とコンクリート	 植栽と鉄柵
	 仕切りなし		
敷地	 植物	 広告	 駐車場
	 敷地	 舗装	 ベンチ

小山東ニュータウンを対象地域として選定し、アンケート調査を行った。調査対象は無指定地域に囲まれており、西に特別養護老人ホームSが隣接している。当施設はこの地域にニュータウンが建設される前から運営されており、当ニュータウンの住民とは何らかの形で接触が行われてきたことが推測でき、本研究の対象として適すると判断した^{注3)}。なお、調査概要及び調査内容を表1及び表2に示す。特に、調査内容中のアプローチ空間を形成する要素については、建物、仕切り、敷地と3つに分類し、それぞれの写真(表3)を見た感想について、好ましさの観点から回答してもらう方法で調査を行った。

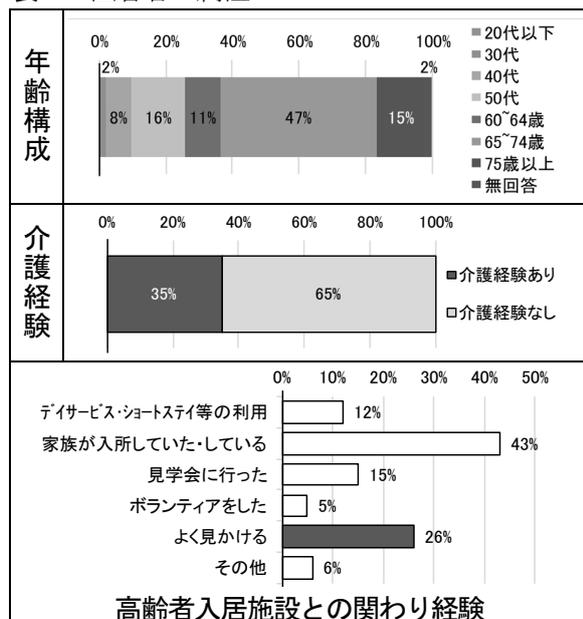
3. 2 回答者の入居施設との関わり

回答者の年齢別割合は、年齢は65~74歳が47%でもっと高く、高齢者の割合は62%であった(表4の上段)。また、介護経験の有無については、「経験なし」が65%をとっている(表4の中段)。

高齢者入居施設との関わり体験については、「家族が入所していた・している」が43%と最も高い割合となっている。次いで、「よく見かける」が26%、「見学会に行った」が15%となっている。

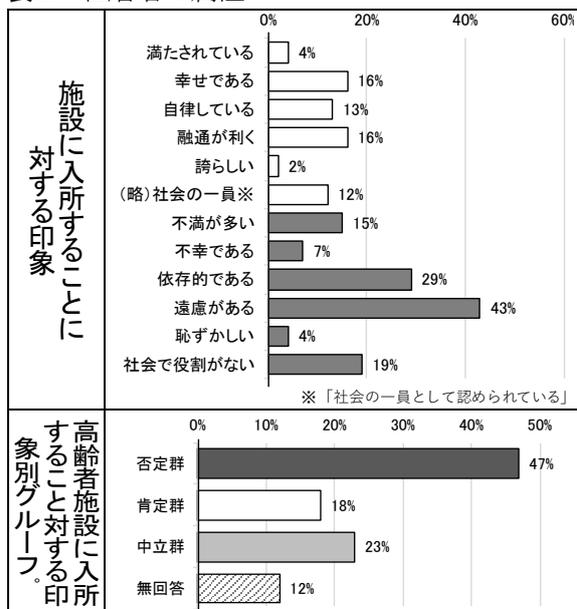
「よく見かける」が上位に位置していることから、施設の外観が地域住民に与える影響は大きいと予測できる(表4の下段)。

表4 回答者の属性



施設に入所することに対する印象については、「遠慮がある」と回答した回答者が43%と最も多く、次いで、「依存的である(29%)」、「社会で役割がない(19%)」の順となっており(表5の上段)、回答者の多くが施設に入所することへマイナスな印象を抱いていることが判った。

表5 回答者の属性



また、回答者の高齢者施設に入所することに対する印象の回答によって、否定的な意見のみの回答者を「否定群(47%)」、肯定的な意見のみの回答者を「肯定群(18%)」、どちらの意見も併せ持つ回答者を「中立群(23%)」として、3つのグループに分けることができた(表5の下段)。

以上の結果から得られた「否定群」「肯定群」「中立群」の3グループのうち、施設に対する印象がはっきりと分かれている「否定群」「肯定群」について、それぞれの特性を見出すことを試みた。有意差が見られた「介護経験の有無」のクロス分析では、否定群は、介護経験ありの割合が約33%と、肯定群の約22%より約1.5倍高く、介護経験が高齢者施設に対する肯定的認識の形成に負の影響を及ぼす可能性が推察された。(図1)

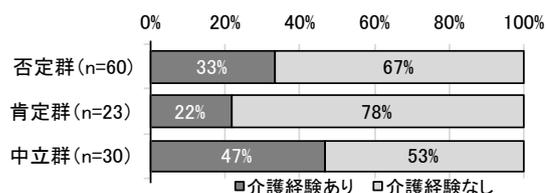


図1 施設評価と介護経験の有無の関係

「施設との関わり体験」のクロス分析では、肯定群は、施設と積極的な関わりがある場合が約61%と、否定群の約42%より、約1.5倍高く、施設との関わり体験が特養に対する肯定的認識の形成に正の影響を及ぼす可能性が推察された。(図2)よって、介護経験の有無、高齢者施設との関わり方が、施設に対する認識に影響を及ぼしたことが推察できる。

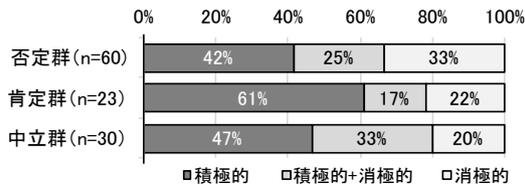


図2 施設評価と施設との関わり体験の関係

3. 3 アプローチ空間に対する意識の分析

本章では、アソシエーション分析を用い、アプローチ空間に対する意識構造の解明を試みる。アソシエーション分析は、マーケティング分野で購買パターンを分析する方法として用いられる手法で、主にPOSデータを分析する場合に用いられる分析方法であるが、大塚らの水辺経験と都市河川の意識に関する研究⁴⁾など、近年、他の分野においての応用が試みられている。本章では、アプローチ空間で視認される要素を、『建物』『仕切り』『敷地』と3つに細分化し、アプローチ空間を見たときに受ける印象について、好ましいと感じる場合と好ましくないと感じる場合の2通りの場合における『建物』、『仕切り』、『敷地』と関連する写真を1枚選んでもらい、それぞれについて、そ

表6 理由一覧

好ましいと感じた理由	入りやすい 信頼できる 癒される 暖かみを感じる 開放的である 落ち着いている 穏やかである やわらかい 家庭的である	親しみやすい 好感が持てる 快適 清潔である 活気がある 裕福さがある 賑やかである 地域性を感じる
好ましくないと感じた理由	近寄りづらい 不信感がある ストレスを感じる 冷たさを感じる 閉鎖的である 騒がしい 激しい 硬い 施設的である	疎い 嫌悪感がある 不快 不潔である 陰鬱である 貧しさを感じる 孤独である 画一的である

の写真を選んだ理由について、既往研究^{5) 6)}を参考に作成した17項目の選択肢(表6参照)から同時に選ばれた回答を用いてアソシエーション分析を行う。

なお、以後のアソシエーション分析の結果の図の見方を表7に示す。この図は直感的に意識構造を見るためのものである^{注4)}。また、本研究では、支持度が30%以上かつ確信度50%以上かつリフト値が1以上のルールのみを意味のあるルールとし、分析対象とする。

表7 図の見方

ルール	理由Aを選ぶと理由Bを選ぶ
図の表現	理由A → ● → 理由B
凡例	丸の大きさ & 矢印の太さ：支持度 = (A∩B) / 全体
	丸の色：確信度 = (A∩B) / A

1) 「好ましい」と評価した理由について

「建物」において条件を満たすルールは、「入りやすい→開放的である」「開放的である→入りやすい」の2つとなっており、他の要素に対する意識に比べて、非常に単純な構造をもっていることがわかる(表8上段の①建物)。確信度の違いから、開放性に対する評価から入りやすさに対する評価への意識の流れは、その逆方向の流れより弱いことが推測できる。

「仕切り」においては、条件を満たすルールは3つと、「建物」に対するそれとほぼ同程度で単純な構造となっており、親しみに対する評価が追加された構造となっている。特に、開放性に対する評価が、入りやすさより親しみと強く関連しており、この2つの理由はそれぞれに相乗効果を与えていることがわかる(表8上段の②仕切)。

「敷地」においては、条件を満たすルールは9つと、他の要素と比べ多少複雑な構造となっていることがわかった(表8上段の③敷地)。特に、「建物」や「仕切り」では見られなかった「暖かみを感じる」に対し矢印が集中しており、「建物」や「仕切り」では与えにくい施設に対する評価を与えている可能性が見えた。さらに、「暖かみを感じる」は「癒される」の方向に矢印がつながっており、敷地に対する評価は、心理的な癒しの効果が期待できることが確認できた。

2) 「好ましくない」と評価した理由について

「建物」において条件を満たすルールは12と

なり、「好ましい」の結果に比べて、複雑な構造を持っていることがわかる(表8下段の①建物)。これは、各理由同士の結びつき強く、「近寄りやすい→冷たさを感じる」といったルールのほかにも「近寄りやすい」と「閉鎖的である」を一緒に選ぶと、「冷たさを感じる」も一緒に選ばれる傾向があるといった「近寄りやすい、閉鎖的である→冷たさを感じる」などのルールが複数あるためにこのような構造となっている。しかし、丸の色が濃くなる確信度の高い評価の意識の流れは、開放性と関連する「閉鎖的である」に収束していることが確認できた。

「仕切り」においては、条件を満たすルールは14つと、「建物」に対するそれとほぼ同程度の構造となっており、「陰鬱である」や「不信感がある」といった評価が削除され、ストレスに対する評価が追加された構造となっている。(表8下段の②仕切り)。各理由同士の結びつき強いなかでも、ストレスや近寄りやすさに対する評価から閉鎖感や冷たさへの評価への意識の流れの傾向が確認できた。

「敷地」においては、条件を満たすルールは4つと、他の要素と比べ単純な構造となっていることがわかった(表8下段の③敷地)。特に、「建物」や「仕切り」では見られなかった「不快」「激しい」「騒がしい」などの理由が複数見られ、特に「騒がしい」に対し矢印が集中しており、「建物」や「仕切り」では与えにくい施設に対する評価を与えて

いる可能性が見えた。さらに、「騒がしい」からは「ストレス」の方向に矢印がつながっており、敷地に対する評価は、心理的なストレスを与える可能性が確認できた。

3) 回答者の属性別のアプローチ空間に対する意識の分析

さらに、意識構造の詳細を探るため、もともと高齢者施設に対して感じていた印象への回答により分類される「否定群」と「肯定群」の両者間の特徴をみる。

(1) 「好ましい」と評価した理由について

表9は「否定群」と「肯定群」の「好ましい」と評価した理由についてまとめたものである。「建物」に対し、両群ともに、「開放的である」が最も上位の評価要素である点においては共通しているが、条件を満たすルールは、肯定群は6つ、否定群は2つとなっており、肯定群の方が、建物の外観から好ましさに対しより多様な心理的連鎖を起こすことが推測できる(表9の①建物)。

「仕切り」においても、「建物」と同様、肯定群はより複雑な構造をもっていることがわかった。特に肯定群は、「落ち着いている」「暖かみを感じる」の2つの要素の相互作用のまとめりと、「入りやすい」「開放的である」「親しみやすい」の3つの要素からなるまとめりとで、ルールのまとめりが2つに分かれた特徴的な構造となっている(表

表8 評価の理由について

	①建物	②仕切り	③敷地
【好ましいと評価】			
【好ましくないと評価】			

9の②仕切り)。

「敷地」においては、両群ともに、「温かみを感じる」が上位の評価要素となっているが、条件を満たすルールは、肯定群は5つ、否定群は10つと、否定群の方がより複雑な構造となっている。否定群においては、「建物」や「仕切り」より、敷地に対して、より多様な心理的連鎖を起こすことが推測できる(表9の③敷地)。

(2)「好ましくない」と評価した理由について

表10は「否定群」と「肯定群」の「好ましくない」と評価した理由についてまとめたものである。「建物」においては、両群ともに、「閉鎖的である」が上位の評価要素となっているが、条件を満たすルールは、肯定群は30、否定群は7つと、肯定群の方が、建物の外観からより多様な肯定的心理的連鎖を起こすことが推測できる(表10の①建物)。

「仕切り」においても、「建物」と同様、肯定群はより複雑な構造をもっていることがわかった。両群とも関係性の強い理由は「冷たさを感じる」「ストレスを感じる」「近寄りやすい」「閉鎖的である」であり、加えて、肯定群では「孤独である」、否定群では「陰鬱である」の理由が見られた(表10の②仕切り)。

「敷地」においては、両群ともに、「騒がしい」が上位の評価要素となっているが、条件を満たすルールは、肯定群は6つ、否定群は11と、否定群

の方がより複雑な構造となっている。否定群の方が、建物の敷地から好ましくなさに対しより多様な心理的連鎖を起こすことが推測できる(表10の③敷地)。

4. まとめ

本研究では、特養のアプローチ空間に関する写真を用いたアンケート調査をクロス分析とアソシエーション分析によって分析し、アプローチ空間に関する地域住民の意識構造について考察した。

好ましさに対する肯定評価において、建物や仕切りに対する意識は比較的単純な構造となっており、開放性と入りやすさに評価の基準が絞られている傾向がうかがえた。一方、敷地については比較的複雑な構造が確認され、敷地の状態によって様々な肯定的情動が引き起こされることが推察された。特に、「温かみを感じる」や「癒される」など、建物や仕切りでは与えにくい施設への評価を与えている可能性がうかがえた。

好ましさに対する否定評価においては、建物や仕切りに対する意識が複雑な構造を持っており、意識間に複雑な連鎖関係を持っていることが確認できた。さらに、その連鎖は最終的に閉鎖的で、近寄りやすいという意識につながることを確認できた。建物や仕切りに対する否定的評価意識が、施設全体に対する評価であるとすれば、敷地に対

表9 「好ましい」の理由における両群の比較

	①建物	②仕切り	③敷地
【肯定群】			
【否定群】			

する否定的評価意識は、個人的なストレス感がより強い意識構造であることがわかった。

施設に対する既存の印象から、回答者を肯定群、中立群、否定群の3つの属性に分け、肯定群と否定群の属性別のアソシエーション分析を行った。好ましさに対する肯定評価において、建物や仕切りについては肯定群の方が複雑な構造を持ち、敷地については否定群の方が複雑な構造となった。この結果から、肯定群は、建物や仕切りの状態によって様々な肯定的情動が引き起こされる反面、否定群は、建物や仕切りより、敷地の状態により肯定的な情動が引き起こされやすいことが推察できた。

一方、好ましさに対する否定評価においては、肯定群の建物や仕切りに対する意識構造が非常に複雑で、否定群はそれに比べると比較的単純な構造を呈していた。既に施設に対し肯定的意識を持つほど、施設に対する期待や評価基準が高まり、施設に対する好ましくない状態に対しより多様な否定的な情動が引き起こされることが原因として考えられる。しかし、このような傾向が、施設の本体である建物に対して最も強く表れるが、敷地の状態に対してはさほど強くなく、敷地に対する意識構造は否定群においてより複雑になっていることが特徴的である。

本研究では、アプローチ空間を構成する要素を、建物、仕切り、敷地に分けて分析を行った。結果から、施設の本体である建物や、道路から認識さ

れる仕切りの状態は、周辺住民に対し、施設に対する評価と関連する意識構造において、開放感や入りやすさなど、全体的な印象に影響を及ぼすが、地域と空間的につながっている敷地の状態は、建物や仕切りでは与えることができない、癒しやストレスなどの住民の個人の心理と関連する情動を引き起こす可能性が確認できた。さらに、既に施設に対して否定的な印象を持っている住民に対しても、肯定的評価であれ、否定的評価であれ、敷地の状態がより強く影響することが推測された。

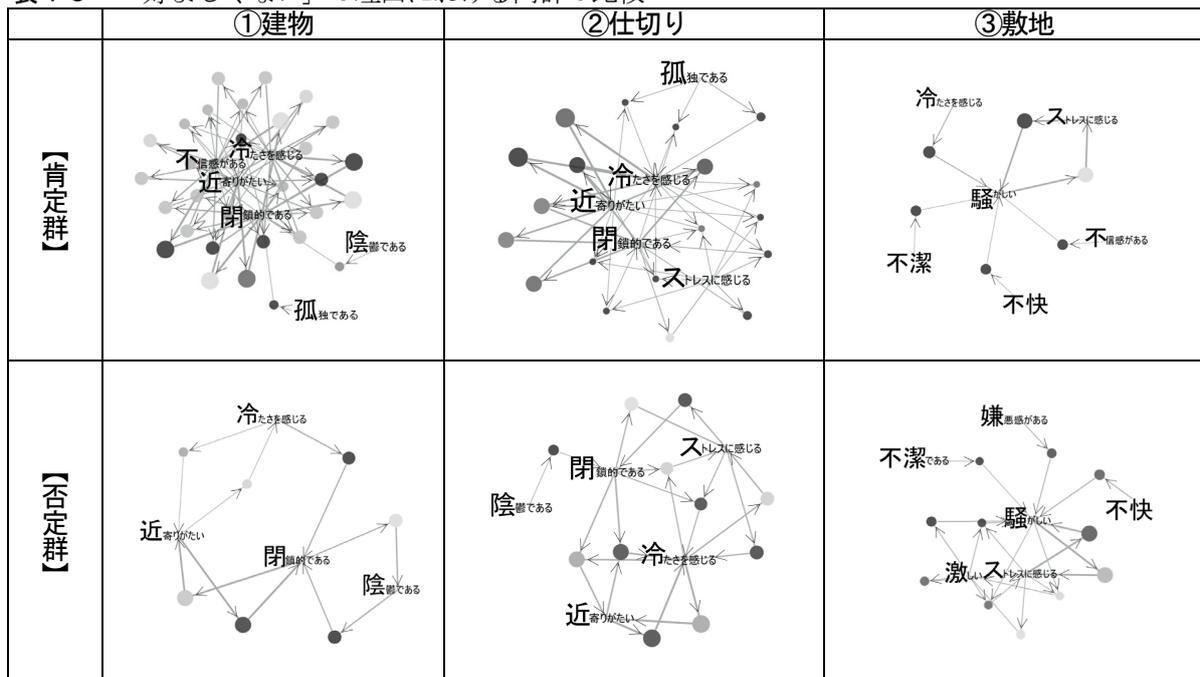
謝辞

本研究を進めるにあたりアンケート調査にご協力いただきました小山東ニュータウンの住民の皆様をはじめ、ご助力いただきました多くの方々に感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 崔熙元, 大原一興, 藤岡森寛: 地域資源としての高齢者居住施設に対する意識構造と立地環境との関連性に関する研究 (その1) 施設に対する意識と地域愛着の関係に着目して, 日本建築学会計画系論文集 (711), 1037-1045, 2015.5
- 2) 崔熙元, 大原一興, 藤岡森寛: 地域住民の高齢者居住施設に対する意識形成の要因と立地環境の影響に関する研究 地域資源としての高齢者居住施設に対する意識構造と立地環境との関連性に関する研究 (その2), 日本建築学会計画系論文集 (723), 1079-1088, 2016.5

表10 「好ましくない」の理由における両群の比較



- 3) 西野辰哉, 笠井翔平: GIS による人口分布推計を用いた高齢者施設の配置適正化計画手法の構築, 日本建築学会技術報告集, 25 巻, 60 号, 813-818, 2019. 6
- 4) 大塚佳臣, 荒巻俊也: アソシエーション分析を用いた水辺経験と都市河川の意識との関連評価, 土木学会論文集, Vol. 70, No.7, III_365-III_372, 2014
- 5) 渡辺久美, 近藤益子他 4 名看: 護学生の老人施設実習前後の老人イメージ, 岡山大学医療技術短期大学部紀要 8 (1), 85-90, 1997-09-10
- 6) 李沅貞他 2 名: 老人福祉施設における介護ユニフォームに関する研究, 畿央大学紀要 14 (2), 17-23, 2017-12-31

注記

注1) 特別養護老人ホームの開設状況に関する調査研究、平成 28 年度 老人保健事業推進費等補助金、老人保健健康増進等事業、みずほ情報総研株式会社

注2) 全国老人福祉協議会に登録されている特養 4,243 件のアプローチ空間の要素及び状態をグーグルマップのストリートビューより確認した。そこで確認された各要素のイメージを元に、今回の調査に用いる写真を収集した。アンケート調査で使用了写真は特定の施設を連想させないため、フリー素材と一部 Google マップから引用した。

注3) ただし、当該施設に対する意見としてではなく、一般的な不特定の特別養護老人ホームに対する意識として回答を求めた。

注4) 分析には Exploratory v6.10 (Exploratory, Inc, USA) を用いた。

[受理年月日 2023 年 9 月 14 日]